

フロイデ200号達成記念に向けて

初代団長 鈴木 徹 (1993~1996)



思い出を二つご披露します。

○上元先生の北海道文化奨励賞受賞の時のこと

道教委に叱られた。「受賞の理由がアポロ男声合唱団を設立して、その名を全国に知らしめたことなのに、そのアポロが解散してしまったのはけしからん」ということだったのだ。

「せめて表彰式の席上、旧団員を集めて祝典演奏をしろ」とのことだった。

あわててなんとか18人を集めて、今は健康を害してメールを長期欠席している櫻井哲次郎氏に指揮をお願いした。

いい演奏ができてほっとしたが、式典後の懇親会にも招待されて出席し、楽しい時間を過ごしたあと、みんなで近くのプリンスホテルで独自の反省会を行い、そこで「やっぱり歌いたいな」ということになり、ちょうど上元先生が札幌発寒中学校校長になられたので、札幌中心に団を結成しようということになったわけであった。

○団歌の誕生～平成元年(1989年2月)

団設立15年、北海道合唱コンクールでの初の金賞受賞に気をよくして、6月の第10回演奏会に向けて練習回数をふやそうと、毎水曜日の北11条カトリック教会での練習の他に、学校開放事業を利用した日曜日午後の練習を月2回ずつスケジュールに入れたころのことだった。

ある日、中央小学校での練習の後、バスセンター駅近くのハルピン飯店に寄って、二階の座敷に上がって飲んだ。十二、三人もいただろうか。

この日は珍しく上元先生も一緒だった。誰かが言っていたのを思い出して、隣に座っておられた上元先生に、「こんな時、気軽に歌える団歌のようなものが欲しいですね。」と尝试してみたものだ。すると先生はいとも簡単に「それはいいですね。考えてみましようか」とおっしゃったのだ。

そのまますっかり忘れていたのだったが、それから2~3週間もいただろうか、練習にこられた先生は「出来ましたよ」とおっしゃる。

「何ですか」と聞くと「団歌ですよ」とのこと。楽譜をみんなの分まで持ってきてくださっていたのである。

わがメールクワイア愛唱の団歌「リラ咲き薫るこのまちに」の誕生であった。

平成元年6月の第10回演奏会(共済ホール)でオープニングコーラスとして初披露され、その日の打ち上げ「第10回演奏会記念祝賀会」でも招待した札連役員の前でも誇らしく歌ったのは言うまでもない。

上元先生メモリアルコンサートを想起して



2代目団長 半田 祐司 (1997~1998)

1997年から2年間団長を務めさせてもらった。就任して自分のすべき仕事は何かと考えたとき、1996年(平成8年)に他界された上元芳男先生のメモリアルコンサートを開催できればとの思いが去来した。しかしこのイベントは、独りメールクワイアで行えば足りるものではなく、生前のご活躍からして縁浅からぬ他のコーラス団体にも参加を乞うべきであるとの思いにも至った。そしてこれを実現するなら、まだ完成を見ていないコンサートホール・キタラを会場に使えないかと目論んだ。先生作曲(遠田京市氏の作曲・編曲をも併せた)の「レクイエム」を新装なった大ホールでオルガンを使って全員合唱ができれば、メモリアルコンサートとして相応しいのではと考えたのである。

メモリアルコンサートに参加を要請したのは、コールアイリス、札幌国際大学合唱団・OG会、静麗会、嶺の会、北洋銀行合唱団で、上元先生がそれぞれ深く関わりを持たれた団体であった。そこでの課題は、コンサートの運営主体としてメールクワイアがこれに当たり各団体はこれに賛助出演するものなのか、あるいはメールを含む6団体の共催であるとするのかを決めることであった。いろんな意見が輩出されたが、当初から考えていた「共催」をともかく了解してもらえた。

会場については、まだ工事中であることもあって、運営の仕様や使用料について判らない状況であった。申込みの手続きに始まって、こちらの希望日を取れるのか、いったいオルガンや会場の使用料がいくらなのか、どのような使用の規制があるのかなど、悩ましいことが噴出し続けた。大ホールの定員が最大2008名で、使用形態に応じて料金に4段階の差を設けてあり、いかなる使用形態でも「立ち見」は全く認めず、レセプションは必ず使わなければならない、オルガンのリハーサルはゲネプロ時の1回とし、それ以外に練習する際には、オルガン使用料と最小使用形態のホール使用料が求められる、など怒髪天を衝かんばかりの条件が判明してきた。チケットの売れ方を睨みながらも、キタラ集客効果の予測も立たず、最小使用形態の申し込みから変更を繰り返し、最終には最大使用形態になってしまった。

メールクワイアの皆さんの力強い下支えを得、他団体の支援を追い風として1998年(平成10年)4月25日、キタラ大ホールでは、オルガンとともに「レクイエム」は演奏された。後日譚としては、メモリアルコンサートの参加者ほぼ全員でキタラ運営についての改善方を要望した。これには若干の応答があったことも付記しておきたい。

フロイデ200号記念にあたって



3代目団長 百石 文一(1999~2007)

札幌メールクワイアは1975年に故上元芳男先生により創立され、10数年後に私は入団いたしました。この時既に先生はウィルス性肝炎に罹患されており、私はこの肝炎の治療法につきご相談をされました。此の頃既にインターフェロンによる治療法が始まっていたので、此の旨をお伝えしました。先生が此の治療を受けられた効果は存知ませんが、此の病をおして指揮をなさりその後2回全道合唱コンクールにメールクワイアは出場しました。その後上元先生合唱指揮60年記念演奏会も大々的に教育文化会館にて行われましたが、この時の出場団体は札幌メールクワイア、北洋銀行合唱団、静麗会でした。

先生が他界されてからコンクールには出場しておりませんが、他の合唱団との交流を行ってきました。

それを挙げてみますと十勝の女声合唱団、山口県の男声合唱団、佐渡の女声合唱団等と、こちらから遠征するのと、向こうから来札されてジョイントコンサートを行ってきました。

私が入団した頃には団員数が非常に少なく、上元先生が自ら団員外の人に頼んでメンバーを集めて演奏会を開くような状態でした。現在はメンバーも増えて40人以上となり、これからの活動が楽しみとなりました。一時は1人の団員がセクトを作り、団を乗っ取ろうと画策し団を乱した人もあり、此れが旨くいかない為に数人の団員を連れて脱退するという事もありましたが、現在は岡村先生という、素晴らしい指揮者を戴き、私達は本当に幸せな団員と思っております。

札幌メールクワイアはどこまでも趣味の団体であり、皆で仲良く楽しく歌って行きたいと願っております。